

## 1 Q7 「隠れたカリキュラム」とはどのような意味ですか。

5 A 「隠れたカリキュラム」とは、教育する側が意図する・しないに関わらず、学校生活を営む中で、児童生徒自らが学び取っていく全ての事柄を指すものであり、学校・学級の「隠れたカリキュラム」を構成するのは、それらの場の在り方や雰囲気であると言えます。

### 【隠れたカリキュラムと人権教育の関連】

10 「隠れたカリキュラム」とは、[第二次とりまとめ] から参考資料として示された概念で、アメリカの社会学者B・ジャクソンの造語である“The Hidden Curriculum”の訳語です。その後、B・シュナイダーが、同名の著書を刊行してこの言葉を広めました。教育学・教育社会学の分野でよく用いられ、「潜在的カリキュラム」と表現される場合もあります。

15 その意味するところを、[第三次とりまとめ] では冒頭の記述のように説明しています。また人権教育との関連についても、「児童生徒の人権感覚の育成には、体系的に整備された正規の教育課程と並び、いわゆる『隠れたカリキュラム』が重要であるとの指摘がある。」(在り方編P9)と述べています。

### 【隠れたカリキュラムの具体例】

20 [第三次とりまとめ] では、さらに「いじめ」の問題を例にあげ、『いじめ』を許さない態度を身に付けるためには、『いじめはよくない』という知的理解だけでは不十分である。実際に、『いじめ』を許さない雰囲気が浸透する学校・学級で生活することを通じて、児童生徒ははじめて『いじめ』を許さない態度を身に付けることができるのである。だからこそ教職員一体となつての組織づくり、場の雰囲気づくりが重要である」(在り方編P9)と述べています。

25 例えば、教職員が級友とのトラブルを訴えた児童生徒の声を真剣に受け止めようとせず、聞き流して何も対応しようとしなかったり、他の教職員や保護者の悪口を平気で児童生徒の前で言ったり、また職員室での教職員間の会話がなく冷たい雰囲気が漂っているような学校では、いくら「いじめをやめよう」などと語りかけても、決して児童生徒の心に響くことはありません。そればかりか、反対に陰で「いじめ」をしたり、傍観したりすることを助長してしまうことになりかねません。

### 【望ましい「隠れたカリキュラム」の実現のために】

30 このように、教職員間、児童生徒間、教職員と児童生徒間の人間関係や、学校・学級の全体としての雰囲気などは、まさに学校教育における人権教育の基盤をなすものと言えます。この基盤づくりのためには、まずもって教職員一人一人の人権尊重の理念に対する理解と認識を深めていく必要があります。さらに、互いに考えを聞き合う、言い合う、受け入れる、提案し合うなどの活動を大切にしながら、人権感覚を高め合う教職員研修を学校全体で進めていくことが求められています。(Q3参照)

### 35 ふりかえり

教育活動や日常の生活場面で、あなたは、自分の言動に決めつけや偏見がないかをどのようにふりかえていますか。または、ふりかえればよいと考えますか。

**参考資料** 授業等で配慮したいポイント例（実践編P81の抜粋）

人権教育においては、その教育内容や方法の在り方とともに、教育・学習の場そのものの在り方がきわめて大きな意味をもつこととなる。

教員は、日々の授業や学習活動、学級経営の中で、児童生徒に対する適切な配慮を行い、一人一人が大切にされる学習環境づくりに努めなければならない。

これらを踏まえ、以下のような視点から、日々の授業等の在り方を繰り返し検証し、学習環境の改善に努めていく必要がある。

場 面	内 容	留意点
児童生徒の呼名	子どもによって異なる呼び方不公平感などを与えていないか。（「〇さん」、「〇ちゃん」、呼び捨てなど）	子ども一人一人に対するイメージやとらえ方が、呼称の違いに表れることがある。一人一人に不平等感を感じさせない配慮が必要である。
席替えやグループ決め	くじびき、名簿順等で決めたり、児童生徒同士で決めさせたりしていないか。	座席やグループを決める際には、児童生徒の個々の事情（視力・聴力等の身体的な事情、心理面の状況を反映する友人関係等）に十分配慮する必要がある。変更等を行う場合にもその判断を行うのは教員である。
机間（個別）指導	机間指導の仕方に偏りはないか。	児童生徒の求めに応じて机間指導を行うと指導の在り方に不均衡が生じてくる場合がある。個別指導の記録をとり、意図的・計画的な机間指導が行えるようにする。
児童生徒の言動等に対する改善点の指摘	特定の児童生徒への改善点の指摘を、他の児童生徒に求めているか。（「（今の発言が）聞こえましたか？」等）	児童生徒の言動等への否定的な評価に基づく改善点の指摘をクラス内の他の児童生徒に求めていると、該当児童生徒に対する負の評価観を、クラス内に固定化してしまうことにもつながっていく。このような評価・指摘は、原則として教員が自らの責任で行う。